

しなかった、明治末期から大正へかけての反自然主義文学のうちの唯美主義的傾向のものに、いちおう中心がおかれるわけだが、この部分だけをとりあげるだけでは、ほんとうは、その正体と意味をたしかめることはむずかしいかもしれない。この本では、そのところろが、おそらくははじめて、文学史の長い流れのなかから洞察され、つかみ出されている。問題の核心をさぐるために、一八八〇年代のいわゆる文学革命期あたりまでさかのぼり、文学の理想像からする諸種の「偏向」を指摘しながら、見透しとしては、戦後の武田泰淳あたりまでを結ぶ線をひき、この派の文学の現実や必然性、その文学史上の意味を考えている。その途上において、いくつもの「美意識ないし美的感覚の裏がえしの試み」、「美的世界におけるいっさいの価値の改価の企て」が追求され、そのプラス・マイナスがあきらかにされている。

耽美派の追求・評価が、この本の大きな柱であるが、もうひとつの柱は、おなじく反自然主義文学でありながら、耽美派とは別の意味を生んだ「白樺」派の追求・評価である。漱石との文学上の血縁の吟味にはじまり（この部分、とりわけ興味ぶかい）、「白樺」の諸特質をするべく論評している。さきにふれた『暗夜行路』の論も、この一連のうちにふくまれているわけだ。

この本には、ほかに、文学研究、とりわけ作家研究についての方法論上の問題が検討されている部分がふくまれている。これは、著者の研究上の態度なり立場なりが理論的におのずからあきらかにされているものであり、右の二本の柱にみえる批評的実践と表裏一体をなしている。わたくし自身をもふくめるいわゆる国

文学者の徒の批評精神の甘さについて余すところがない。文学研究者といわれるものが、この鏡にむかって己の顔をおりおり写してみるべき性質のものだ。

どうにも意を尽せない。書かでものことばかりをたらねてしまったようだ。総じていえば、ちかごろ世に問われた日本の近代文学論（あるいは研究）のうちで、とりわけ感深く読み、出色のものと思った。きびしい気分の中に、文学上の香気がただよっていることでは、研究書として稀有の印象である。歯切れのいい、格調のある文体とも関係していると思う。

明治書院刊・定価六〇〇円

（早稲田大学教授）

## 窪田般弥著 『日本の象徴詩人』

石 丸 久

あえて比較文学というわけではないが、この国の近代文学が欧米のものの考え方や感じ方の影響をうけていることはいうまでもないのだから、明治・大正・昭和の文学を論ずるには、彼を知り我を識らねばならぬことはもはや常識である。この研究方法が最も活潑に、かつ的確になさればならぬ分野は、とりわけ、詩歌のジャンルであろう。

明治以降の詩を論じ詩人を説いて、いわゆる文学史的に筋の通ったものや鑑賞の面ですぐれたものは、従来必ずしも少ないとはいわれない。作に対する印象批評や人に対する追憶のたぐいまた

積めば棟に充ち、載せれば牛も汗をかく程であろう。

明治以降のこの国の象徴詩人について、その作について、西欧の詩に通曉し、日本人の作品をよく精読して、己れの詩眼をとおしてスマートな説をスマートに展開した著書が、窪田 般弥氏の『日本の象徴詩人』である。

国文学・日本文学科出身の近代文学研究者でなければ今日あまり顧みない古い雑誌——「太陽」「帝國文学」「新潮」「早稲田文学」などという雑誌類から、例えば角田浩々歌客とか桜井天壇とか相馬御風などの評語を漁り集めてはそれらを有効に配列し、フランス文学専攻の学徒でなければ原著原文について看ることを殆どしないマラルメの芸術論をユレに聴く——これが『日本の象徴詩人』の著者の立論叙述の態度にはかならない。

著者はフランスの文学語学を専門の対象とし、この国の言葉を使使して詩を巧みにする人である。

全篇通じて、個々の詩人の特質——とくにテーマとする象徴主義とのかかわりあいについて——はまことに鋭くザツハリツヒにとらえられていて、読者——ただし、かなりそれらの詩人の作品に親しんだことのあるみごうしや——をうなずかしめるものがある。とりわけ、何を象徴といい、何のようなあり方を象徴主義というか——それが、この国ではまさしく一筋縄では行かぬ八幡の藪、つまり、共時的にも多種であり、通時的にも多様である。個々の詩人について、その解釈を臨機応変に適用しつつもゆるぎない詩観で裁断する困難を、著者は決して避けてはいない。

およそ、文学研究の資料というものは、三つの種類に分けられる

——第一に作品そのもの、第二にその作者自身の言説、第三にその作品や作家についての直接の論述。数々の作品について、第一の資料はいうに及ばず、ヴァリアントにも注意し、第二の資料についてまた丹念に探り求めて著者が引用している条々は、当然のこととは言いながら、まことに会心の労作たるを裏証して余りある。本書三〇頁以下に示された「音楽」の問題も、ほんの一例にすぎないが、注目すべき解説である。通説を是正する意味でも過般の村松剛氏の意見と共に傾聴すべきであるが、紙幅の狭隘が、著者をして所期の解説のおそらく片鱗にとどまったであろうことを遺憾とする。

われらずでにして隨を得た。なお蜀を望むの言を弄するなら、個々の詩人についてもなお時代の背景や伝統の連関をも少しあつく顧みてはしかった。——例えば、白秋の象徴を論ずるに当たって茂吉を引き用いているが、この場合も、それぞれかなり層のある片や「明星」流、片や「アララギ」派の伝統を負いながら、またその伝統を成す要素となつてゐるわけで、とくにこの二流派は、まさしく対立的な何物かを互に深く持し、それでいながら、白・茂互にシンパシイを懷いた経緯にこそ、平板文学史の常識をこえた意義と興味があつたはずである。その論述に欠けたるを憾まざるをえない。言葉のシャレを聞きかえすような文学心のない不思議な文学研究家が、実証の名のもとに単なるデータの集積を誇示し、または、ことふりたる訓詁注釈に言わずもがなな饒舌を銜いつつなお自他ともに文学研究家の名をゆるしゆるされてまかり通る当節、かかる文学史の幽趣を、かかる詩人のあいだがらの微韻

をこそ、この詩人文豪家にはききたかった。とまれ、窪田般弥氏の労作は、近來出色の好著といえよう。

紀伊国屋書店刊 二二〇円

(早稲田大学講師)

時枝誠記著

## 改稿『国語教育の方法』

白石大二

この書物は、著者が、その言語過程説の理論の追及・発展として、国語教育の技術方法が立案される場合の根拠を学問的理論的に探索されたもので、(一)戦後の国語教育界に対する立場、(二)国語学と国語教育との関係、(三)国語教育の機構、(四)国語教育の内容としての国語、(五)国語教育の目標と教科の特質、(六)教育内容の分析と教育の方法、(七)教科書の意義、(八)国語教育と人間形成、(九)国語教育と国語政策との関係、(十)古典教育の意義の十章に分かれる。

同じ書名の旧版の全面的な改稿であつて、旧版で、戦後の経験主義・総合主義の国語教育の理論を批判して能力主義・分析主義の国語教育を打ち立てられたのを、改稿で、学習指導要領の改訂を機にあらためて明確にされたものである。

国語教育の方法を学問的理論的に解明しようとする著者の目的は、第一に、その結果十人が十人その峰をきわめることのできる平凡者の道を求めるところにあり、第二に、社会の風潮や教育思潮に左右されない国語教育の不動の礎石を求めるところにあり、第三に、国語教育の目標を、戦後の「こと」(言語経験)の教育

から「かた」(技術方法)の教育へ転換させる基礎となる理論を提供するところにある。

著者の学説の述べ方は、諸書を通じて、一つには、権威ありとされる通説に対する批判として展開され、二つには、その一面、従来の用語をあえて改めようとはされないもので、内容については、著者独自の意味づけがなされるところに、特色がある。

この書物においても、たとえば、「経験」については、国語教育は、「経験」というような語によって規定されるものとは別の営為であつて、言語過程説の言語観に立つなら、国語教育とは、表現・理解という実践的活動の教育であり、経験というよりはもっと能動的な実践的行為の指導でなければならないといわれる。

「機能」については、言語の機能とは、言語と生活との関連の事実であつて、国語の機能は、あらゆる生活目的を達成する手段であり、国語教育の目標は、そのような手段・技術・方法の教育であり、習熟である。国語教育は、内容の教育ではなく、音楽や図工や体操と同様に、訓練学科・技能学科と考えられる。

なお、機能文法・体系文法などの名称については、正しくは機動文法あるいは機動的教授法、体系的教授法と呼ぶべきことをいわれ、文法が実践に結び付く可能性があるか否かは、又法体系の理論の内容に関することであつて、体系的に教えるか機能的に教えるかということとは全然別の問題であるとされる。

「分析」については、言語行為の手段方法を効果的に身につけるには、行為の全過程が適宜に分析され、分析された個々について練習することが必要であり、分析的教育法とは、それらが総